

子どもと保護者が全員で創る:子どもの好きから始まる「わたしプロジェクト」

■ 実践者3名のエッセイ「はじめての試みを振り返って思うこと」

●高学年部担当 シリクルチャヤノント明希

後期の活動計画を立てる際、目指したものは大きく二つありました。それは、前期で行った「好きから始まるわたしプロジェクト」をさらに展開させる事と、「社会との関わり」でした。全 7 回でそれをどのように活動として成り立たせればいいのかと、時間的制約から考え始めたことが、後に大きな課題になりました。

自分たちの「好き」を社会と関わるきっかけとして活かすにはどうしたらいいのか。そこから後期の「C 財団との交流プロジェクト」活動が生まれました。以前、高学年部の活動として訪問したことがあるスラムにある C 財団に通う子ども達と、前期で深めた「好き」を通して交流することで、社会を知るきっかけとなればという考えからです。しかし、これは担当者側が考えたことでした。

そして、実際にこの活動計画をもとに後期の活動が始まります。訪問を終え、振り返りのとき、子ども達の一部から不満の声が耳に入りました。その子たちによく話を聞いてみると、「意見を求められず交流会が決まっていたこと」に対しての不満でした。「『好き』を活かして何ができるか、何をしたいか」と子ども達に十分に聞くこともなく、大人が活動を決めていたことに大きな問題がありました。なぜそうなったのかは、時間のなかで子どもたちの前期で見せた自分の「好き」を生かすには交流会がいいだろうと担当者が判断し、交流会という相手のある活動においては交流相手に失礼があってはならないという、担当者側の配慮が先にきて、ついつい大人先導の活動になってしまっていたということです。中学生、高校生が在籍するこのクラスでは、本人達の意志は最も大切にすべきものです。だからこそ、子どもたち自身の「好き」から活動をつくろうとしていたはずなのに、担当者が結果にこだわってしまいました。もっとも重要なのは子どもの意志だと、この子どもたちのことばで改めて気づかされました。

ここは、学校ではない親と子どもが作り上げる「バイリンガル教室」です。常に子ども一人一人が活動の主人公として輝ける場になるよう考えてきました。それでもついつい、担当者の描く理想の形を押し付けてしまいました。もっともっと子どもの意志の重視を意識して活動していきたいと思います。

●高学年部担当 安藤浩

高学年部の活動テーマには例年決まったものがなく、前年度の担当者の反省を生かし、子どもたちの感想を取り入れながらテーマを決めていきます。

今回の「好きから始まるわたしプロジェクト」も、前年度の反省を基に今回初めて生み出したテーマでした。これまでも自分の好きな事柄を絵本にしたり、好きなグッズを作って販売したりといった活動はありましたが、ここまで『好き』にこだわって突き詰めた活動はありませんでした。マインドマップ作りなどは初めての試みでしたが、今までの多少限定されて、ある程度見通しがつきやすい活動よりも、より自由度が高い作業で、子ども達にとっては自分や友達の新しい一面を知る機会になり、よかったと思います。

前期で「自分の『好き』から他者とつながる」、そして後期では「自分たちの『好き』から社会とつながる」というコンセプトでしたが、このコンセプトで具体的にどんな活動を行うのか、これが一番難しい問題でした。コンセプトとして設定した『目指すところ』を実際の活動の『実践』にどう落とし込むかに担当者は苦勞しました。まずは、マインドマップから出発して、それをどう共有する？ 発表をどうする？ 社会とのつながりでワークショップ？ 寄付をする？ 外部との交流？ など、どんな活動にしたらいいか、担当者で議論を重ねながら進めていきました。

後期には、社会との繋がりという目的で交流プログラムを設定しましたが、子ども達に出来るだけいい活動・経験をしてもらいたいという思いから、担当者がお膳立てをし過ぎて、子ども達の自主性を育てるという目標から離れてしまったのでは、という反省があります。また、1日だけの交流日を目標に、そこに向かって活動をつくる場合、その一日に参加できなかった場合の子どもの落胆と参加不全感が強く残りました。フォローはどうしたらよかったのか、といろいろ考えました。しかし、そもそも、もっと活動の過程に子どもたちが主体的に参加し、参加意義が感じられる、そんな活動にすることが大切だったのではないのだろうかと思います。後期は最後の交流会の成功に眼が行き過ぎていたのではないのかと反省しています。

次年度以降は、この反省と子どもとの対話の中からバランスをとりつつ、よりよい活動を目指していく、ということになります。そこで、毎回、毎回の活動を一人一人がつくる、そんな毎回のワークショップ企画を子どもたちが考える、そんな活動にしようと思います。

子どもから始まるという、最終形が見えない活動だからこそ、担当者も自分の得意分野で支援するなど、子どもも大人もそれぞれの個性を生かした活動を創りあげられる楽しみがあると思っています。

●高学年部担当 柳原麻衣

「高学年部楽しくないから中学年部にもどりたい。」始まりは高学年部にあがってきて一年目のAちゃんのこんな一言でした。担当者主導の授業を素直に楽しんでいる様子の中学年部と異なり、思春期に入りはっきりとした自我の芽生えも感じられる高学年部の子どもたち。活動の好き嫌いがはっきりしてきているのは感じていましたが、正直、ショックでした。教育の専門家ではない親たちで運営している私たちの教室は、日本語のいわゆる読み書きを勉強する代わりに、楽しく活動する過程で担当者や友達とのコミュニケーションを通して自然と日本語や日本文化に触れる機会を増やせることが強みです。更に、高学年部は年齢に応じた成長を考慮して自主性を育てる活動をしているつもりだったのに、楽しくないと感じていたとは!自身も高学年部の子を持つ親として、この年齢の子どもと活動する難しさは痛感しています。思春期や自我の芽生えに加え、日本語習得度のばらつきも年齢が上がるほどに感じます。できるだけ全員が楽しく取り組める活動を、と担当者がどんなに心を砕いても、子どもに届いてないと感じる場面が度々ありました。

そこで、ならばいっそのこと、それぞれの子がやりたいことをやりたいようにやってみる活動はどうか?と生まれたのがこの『『好き』プロジェクト』です。これまではせっかく仲間と集まるのなら、と全員一緒に取り組む活動が中心で、子ども達が個々に全く違うことを行う活動は初めてのことでした。子ども同士のコミュニケーションが減ってしまうのでは?という心配や、子どもが中心になって進めるためどんな風に活動が進んでいくのか担当者が予測できない不安もありました。さて、結果は…「実践の記録」を読んでいたいただければ分かるとおり、担当者のそんな心配は杞憂でした。お互いの好きなことを見せ合ったり質問したり、子ども同士や担当者とのコミュニケーションはむしろ活発になっていったように思います。また、これまで、そこまで意欲的な様子が見られなかった子が自発的に準備を進めて活動に取り組む姿も見られたのは、自分の好きなことや得意なことだったからだと思います。どう進むか不安だった点も、発表会ではそれぞれが思い思いの形で「自分の『好き』」を発表することができ、たくさんのそれぞれ違う「好き」を見ることができ、担当者も本当に楽しかったです。

しかし、欠席が多かった子は作品を完成できず達成感が足りなかったという感想もあり、また後日、ある子がボソリと一言。「自分が中心で進める活動は、今日は何をやるんだろう?というワクワクがない!」この感想に、「学びの主体性」の在り方も様々なのだと考えさせられました。親として担当者として、学びの最適解を探す旅はまだまだ続くようです。